

『乙女にして殉教者、
聖ヴァレリアの祝日の説教』 試訳

渡 邊 浩

緒言

ここに訳出する「乙女にして殉教者、聖ヴァレリアの祝日の説教」は、フランス国立図書館所蔵のラテン語写本 2768 A に伝えられており、そのテキストは *Analecta Bollandiana*, t.8 (1889), pp.278-284 と *Catalogus codicum hagiographicorum latinorum: antiquiorum saeculo XVI qui asservantur in Bibliotheca Nationali Parisiensi*, Hagiographi Bollandiani, 1889-1893, t.1, pp.196-198 において、それぞれ『リモージュの殉教者、聖ヴァレリアの奇跡 (Miracula Sanctae Valeriae Martyris Lemovicensis)』、『聖ヴァレリアの伝記 (Vita Sanctae Valeriae)』として刊行されている。また、前者の解説によれば、著者は 885 年¹ に行なわれた聖ヴァレリアの移葬に立会ったシャンボンのサント・ヴァレリー修道院の修道士と考えられている。

この説教は「序言」「伝記」「奇跡」の 3 部で構成され、「序言」と「奇跡」のテキストは前者、中間部を成す「伝記」のテキストは後者に載せられている。ただし、「伝記」の第 3 章から第 5 章は省略され、校訂者による簡単な要約のみが付されている。ここでは、これらを定本とし、「序

¹ 以下の「奇跡」に見られる 885 年という年代は、R. ランデスが主張しているように、アデマール＝ド＝シャパンヌによって 985 年から 885 年に改竄されたものと考えられる。Richard Landes, “The Dynamics of Heresy and Reform in Limoges: A Study of Poular Participation in the “Peace of God”,” *Historical Reflexions / Reflexions Historiques*, vol.14, No.3, 1987, p. 477.

言」「伝記」「奇跡」と順に並べて翻訳した。

聖ヴァレリアは中世末期にカオール、クレルモン、ブルジュ、ボルドー、パリなどで崇敬を受けたが、とりわけ聖マルシアルとの関わりで知られている聖女である²。彼女とその婚約者ステファヌス公をめぐる物語は、聖マルシアルの『古い伝記 (Vita antiquior)』³、ここに訳出した『説教』、聖マルシアルの『長編の伝記 (Vita prolixior)』⁴と、時を追うごとに潤色の度合いを増してゆくが⁵、その変遷過程を示す『説教』中のエピソードは、『長編の伝記』の制作意図を探る上でも、一つの手がかりを提供するものと考えられている⁵。

訳文

I. 序言

親愛なる兄弟たちよ。あなた方は神の愛に火を灯されて、至福なるヴァレリアの祝日を祝うため、熱意をもって集まって来た。そのあなた方の愛情に対して、彼女の寛大さ、また受難、さらにキリストの恩寵が彼女の敬うべき墓所で行おうと望まれた奇跡について、我々が手短に知らせることはふさわしいと思われる。それらの奇跡は、一部は先人たちの文書によって我々に伝えられ、また一部は信者たちの言い伝えによって語られてきたものである。

すなわち我々がそうしようと思うのは、いかなる聖人のミサにおいてであれ、彼らがどのような血筋、身分の者なのか、あるいはいかなる死

² *Bibliotheca sanctorum*, Città nuova, 1998, vol. XII, col.906-907.

³ 拙稿「『主人である司教マルシアルの生涯と奇跡』試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第14号, 2013年, 117-126頁。

⁴ 拙稿「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(I-XIII) 試訳」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要』第10号, 2009年, 59-75頁。「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(XIV-XX) 試訳」同, 第11号, 2010年, 99-115頁。「『リモージュ司教にしてガリアの使徒である聖マルシアルの伝記』(XXI-XXVII) 試訳」同, 第12号, 2011年, 93-108頁。

⁵ Landes, op. cit., pp.473-478.

によってこの世からキリストのもとへと移り住んだのかが知られるなら、彼らはいっそう快く敬われるからである。

II. 伝記

1.

かくて、至福なるヴァレリアは、リモージュの町で、世俗の地位によれば豊かな財産に恵まれた高い身分の、しかし異教の慣習に留まっていた両親から生まれた。なぜなら、その地方の方々では、未だ使徒の説教によって悪霊に対する祭祀が排除されていなかったからであり、未だふさわしい敬意がその地方の人々によって権威者たる神に示されていなかったからである。キリストの受難によって人類が贖われ、キリストの到来によって地獄の城塞が破壊され、そして楽園の門に門をかけていたもろ刃の剣がキリストの憐れみによって取り外されたにもかかわらず。

2.

それでも、聖なる乙女ヴァレリアは心身ともに気高く成長して行った。確かに、彼女は、容貌が美しく、性格は愛らしく、慎み深さという評判で飾られていた。彼女は話し方に魅力があり、才気煥発で、飲食については控えめであった。また、彼女は、未だ神聖な洗礼の水によって生まれ変わっておらず、また未だキリスト教信仰の秘儀によって清められてはいなかったが、それでも、天の元老院において、天の祖国の市民たちのうちに迎え入れられるにふさわしいと見なされていた。彼女は、輝かしい地位をもち、世俗的栄光への誇りで思い上がった、ステファヌスという名のある貴族の若者から求められ婚約していた。

[3章から5章では、聖ペトロと聖マルシアルのローマにおける使徒としての活動と、聖マルシアルのガリアへの伝道、そしてその地における彼の説教と奇跡についての物語が続く。その後は以下の通りである。](校訂者)

6.

実際、聖なる乙女ヴァレリアは、この説教を聞き、これらの奇跡を目

撃した後、彼女の町と地方の多くの人々の群れとともに、聖なる三位一体の信仰を受け入れ、神聖な再生のための洗礼を、聖なるマルシアルから受けた。また、純潔は信者たちが守るべきいかなる品位にもまさると聞いたので、彼女はキリスト教徒になると間もなく、主なる神に、生き生きとした気持ちで、この純潔を捧げた。さて、その同じ頃、彼女の前述の婚約者、すなわちガリア人たちの輝かしく最も力ある公は、ロワール川とセーヌ川を越えて、敵に向かって進軍していた。そのために生じたことは、聖なる乙女の周辺で、全能の神の恩寵によって、至福なる使徒マルシアルを通して為されていたことの何一つも、彼は知ることができなかった、ということであった。とはいえ、引き返して来るとすぐに、彼の耳に、婚約者のヴァレリアが自分以外のだれかを愛しているという噂が届いた。

7.

この噂を聞くと、あまりの激情に突き動かされ、また怒りの強い刺激に駆られ、彼は彼女の家へとやって来た。そこは、至福なる乙女ヴァレリアが祈りのために留まり、キリストの賛美に専念し、徹夜の祈りや、断食や、純潔という評判を飾ったその他の善行に尽力し、そして自分の婚約者のために、神が偶像の誤謬を捨てさせ、彼を神の認識へと導くよう心から懇願していた場所であった。そして、彼女が公をこの上ない好意を示して迎えたとき、彼は恐ろしい眼差しで彼女を睨み、声を荒げて、噂が彼に告げたように、彼女が自分以外のだれかを愛しているのかと問い糺し始めた。一方、神の乙女は少しも怯えることなく、丁寧な口調で、目を伏せて、彼に次のように答えたと言われている。

「若く愛しい方。私は死すべき人間を愛して、あなたに不正を働くようなことはしていません。ただ、私たち二人を引き合わせ、天地を支配している方に、私が婚姻の床を退けて、私の純潔を捧げたということを理解してください。私は、私の主人はイエス・キリストと言っているのです。すべての時に先立って父より生まれ、しかし時の終わりに乙女マリアから生まれ、神の力によって人類を造り、また自らの受肉の秘儀によって人類を贖った方です。もしあなたがこの方を信じようと望まれ、またこの方の秘跡によって清められようとされるなら、純粋な愛が最後まで

私たちの間に留まるでしょう。そして、肉体が葬られた後に、私たちは終わりのない生へと到達するでしょう。」

荒れ狂った若者は、至福なる乙女にこれ以上話すことを許さなかった。それどころか、剣を抜くと、彼女の首に斬りつけ、そして一撃で彼女の首を刎ねて、キリストの殉教者を生み出した。すると彼女の魂を、天使の群れが賛美歌を歌いながら受け取り、キリストの面前で、至福なる神の母の合唱隊に加えた。一方、魂の抜けた亡骸は、神の力によって立ち上がると、自分の手で首を拾い上げた。そして、彼女の足跡が今日まで印されているのがわかる大理石が証言していることだが、しっかりした足取りで聖なるマルシアルのところまでやって来た。それは、これほど偉大な人物が聖務を果たしている時であったが、そこまで来ると、亡骸は静かに倒れた。もし、これとよく似た多くのことや、これ以上のことを行ったキリストの力が衰えていないと思うのであれば、だれにとっても、これが疑わしいとは思われないだろう。

8.

一方、彼女の婚約者は、これほどの奇跡を目の当たりにして、大変な恐怖に襲われ、武器を捨てて聖なるマルシアルの足下に身を投げ出した。そして、救いとなる助言を与えてくれるよう、涙ながらに懇願し始めた。すると聖なるマルシアルは彼に贖罪を科し、救いの秘跡を施した。また、ふさわしい折に、彼に聖水をもって洗礼を授けた。一方、彼は至福なる乙女ヴァレリアの亡骸を、自分のために用意していた墓に、敬意をもって埋葬した。確かに、至福なるヴァレリアの魂が、天においてキリストの憐れみに働きかけ、この若者の回心を成し遂げたと信ずるべきである。というのも、彼女は地上において、彼のために多くの祈りを誠実に注いだからである。無論、前述の若者である公は、このことに気づいたと考えられる。それは、盛大な寄進を行った際に、彼が支度金の名目で聖なる乙女に約束していたすべてを、彼女を改宗させ、最高の敬意を払って埋葬した聖なるマルシアルに、そっくりそのまま捧げたからである。これらのうちでも、長い間そのまま残ることができたもの、すなわちヴィラや地所は、至福なるマルシアルの修道院の兄弟たちによって保持されている。そして、それらが、この寄進によってこの敬うべき人物のため

に為されたのだと、尋ねられた者たちは確信をもって答えるのが常である。

Ⅲ. 奇跡

1.

全能の神の恩寵が、至福なる乙女ヴァレリアの聖なる亡骸が埋葬されていた教会で、多くの、数え切れないほどの奇跡を行った。しかし、至福なる使徒マルシアルがその同じ教会に自らを埋葬するよう命じていたので、これらの奇跡は彼の功績に帰されていた。そして、それはまったくもっともなことであった。というのも、彼女において彼女を通して、神の慈しみ深い力が行ったあらゆること、全能の神のあらゆる賜物が、その埋葬後、敬うべき司牧者マルシアルに帰されているからである。しかるに、聖なる乙女の亡骸が引き離されてからこれまで、ふさわしい報告によって明らかになったと思われる出来事が生じた。というのは、彼女の亡骸がこちらに持ってこられたのは、次のような理由からである。この地は、当時はヴィラと呼ばれていたが、今では彼女を称えた共住修道院と見なされていて、また世俗の支配者からはたびたび羨望の目を向けられ、サン・マルシアルの修道士たちからは隔たっていた場所であるが、この場所が彼の崇敬とは切り離され、聖職者たちの所有の下で平穩に管理されるためであった。そして、三位一体の神の力が彼女の功績に対してこうした措置を許されただけでなく、彼女の崇敬に対する善良な者たちの信仰は、神のこの力が存在することに加えて、この場所にもっと多くのものを与えた。

2.

それゆえ、彼女の神聖な亡骸を運び出し、いっそうの注意を払って再び納めるのが良い、と我々が考えたときに為された奇跡を、我々は黙ったまま隠しておくべきではない。確かに、我らの主イエス・キリストの受肉から 885 年目の年に、我々の罪が招いたことだが、夏の気候が冬のような雨天に変わった。そして水が大量に増したために、川床から遠く離れた耕地へ行くのに、だれも筏を使うか泳ぐかしなければならなくなった。なぜならあちこちで橋は崩れ、水車小屋は壊れ、そしてかつて

は獣が走り回るのが見られたところに大量の魚が泳いでいたからである。それで、我々は神の憐れみを請い求め、乙女にして殉教者、至福なるヴァレリアを介して、雨による洪水を止めてくれるよう、また彼女の執り成しによって我々にふさわしい静けさを与えてくれるよう願った。神は、これほど偉大な乙女の働きかけのゆえに、我々の祈りを聞き入れられ、まるまるひと月の間、我々が望んだ通りの静けさを与えようと決心された。そしてその後数年、異常なまでに降り続いた雨が多くの地方でヴィラや修道院を住民や家畜や家財もろとも破壊したにもかかわらず、その過剰な雨は、至福なるヴァレリアの功績のお蔭で、我々にはいかなる損害をも与えなかった。

3.

聖なる乙女ヴァレリアの亡骸がかつて以上に気高い熱意をもって再び納められたという噂は、瞬く間に駆け巡って、多くの者たちの耳に届いた。そして、彼女の執り成しによって豪雨が退けられ、喜ばしい静けさが与えられたことを知ると、民衆たちの大群がこの地に殺到し始めた。そして、全能の神に、数えきれない感謝の行為で報いようと求め、自分やその家族を、これほど偉大な乙女にして殉教者の執り成しに、深い信仰をもって委ねよう願った。次のようなことが起こった。至福なるマルシアルが多くの奇跡のしるしによって異教徒たちにまで知らしめたトゥルスと呼ばれていたヴィラから、他の民衆の群れとともにある男が彼女の墓へとやって来た。彼は耳の管がふさがっていて声を聞くことができず、また舌の働きが奪われていたために言葉の合図を使って欲することを伝えることもできなかった。彼は地面に身を投げ、言葉を使えなかったので、心で念じて、それほど偉大な乙女にして殉教者を介して、自分を助けてくれるよう神の憐れみを願った。すべての人の心の中を見通す憐れみ深い神は、彼の意図を汲んで、喜んで願いを聞き入れられた。そして、神は自らの殉教者の功績を示すために、12年の間彼から奪われていた聴覚と言葉を回復させた。すると彼は明瞭な声で、神と聖なるヴァレリアに感謝を捧げ始めた。それは、彼が話せるようになったこと、そして彼の話聞いた者たちの声が十分に聞こえたことに対する感謝であった。実際、この男は今も存命しており、多くの奇跡の証人となって

いる。

4.

聖なるヴァレリアの功績により、神の同情を得て、ここで為されたことを我々は目撃したが、それを書き加えることは、そうするに値することと考える。サムエルというある男は、今なお我々とともにあるが、この俗人がだれの名誉に浴しているか、あなた方の多くに知られずにはいないことと、我々は了解している。天の配剤たる神の意志は、様々な仕方ですでに信ずる者たちに神の存在を知らしめるが、語り尽くせない恐怖をもってこの男を打ちつけた。それは、自らの死期が迫っているどころか既に到来したことを分からせるためであった。そこで彼はここへ逃げ込んできて、武器を捨てて神聖な修道服を受けることを自分に許してくれるよう懇願し始めた。それは至高の父のぶどう畑で1時間働いたと書かれているあの者たちとともに、報償の銀貨を受け取りたいと思ったからであった。彼があまりに見境なく願うので、我々はとうとう承諾し、彼が武器を捨てた後、修道院の習慣に従って、彼に神聖さのしるしを与えた。その後まもなく、至福なる乙女ヴァレリアの執り成しで恐怖がはねのけられると、彼は澄み切った喜びに満たされて、我々とともに暮らし始めた。そして、彼は、彼が恐れていたのとは別の死者と見なされている。なぜなら、彼はかつての虚栄と世俗の誘惑に対して死んだのであり、そして今や神聖な行いによって生きようと努めているからである。

5.

ところで、それほど過去のことでないが、人々が証言しているように、至福なるヴァレリアの殉教の日に、ある奇跡が生じた。そしてその奇跡は見ていた者たちの心を大いに驚かせた。すなわち、ある女は四肢の収縮にひどく苦しんでいたために起き上がることができず、また、地面に一步も足跡を残すことができなかった。彼女は他の者たちの手を借りてここに連れて来られた。そして、神聖なミサの間に、他人から激しい暴力を加えられたかのように、涙をたくさん流しながら声を上げ始めた。どうしてこれほどのことがあるのか。筋肉の収縮が解けると、彼女の身体は、身体の病が妨げなかったなら当然であったはずの身の丈にま

で伸びた。そして間もなく、地面から立ち上がると、いつも他人の手を借りて連れて来られていた彼女が、自分の足で歩き始めた。人々はどうしたことを見ると、全能の神に限りない感謝を捧げ始めた。そして乙女にして神の殉教者ヴァレリアが、神のもとでどれほどの功績をもっているかということに、深い信仰をもって驚嘆し始めた。

6.

あなた方の多くは今でも、この地方がステファヌスとアッポーおよび彼らの従者によるひどい略奪を耐えた時代を覚えている。すなわち、畑仕事の成果、家畜、動物の群れ、またこの地の住民が所有し得た何であれ、前述の略奪者たちは、神への恐れも人への恐れも気に留めず、野蛮なやり方で奪い取っていた。彼らの一人がここにやって来て、ここで神に賛歌を捧げようと努め、また聖なるヴァレリアにふさわしい崇敬を力の限り示そうと気を配っていた兄弟たちの群れから、一頭の牡羊を奪い取った。そして彼の馬の首にのせて、同様の狼藉によって既に多くの略奪品を運び込んでいた住処へと持ち去った。しかし、牡羊は神の力と聖なるヴァレリアの執り成しによって守られた。一方、子羊を奪った男の方は、彼の罪に比べれば全く軽い罰によって罰せられた。なぜなら、神の憐れみ深さは、彼が暴力によって犯した悪事を悔い改めることができるよう、理解力を奪わなかったのである。実際、牡羊を持ち去った男の馬は狂ってしまい、生きている限り暴れ狂うのを止めなかった。これを見ると、略奪を働いたこの男と彼の同罪の仲間たちは、大きな恐怖を感じ、この牡羊を25頭の牡羊とともに聖ヴァレリアの修道士たちに送り返した。そして、自分たちの上にそれ相当の神罰が下ることのないよう祈って欲しいと、請い求めた。

7.

アマルベルガという名のある女は、正しく配剤する神の判断により、病による様々な責め苦に遭った。すなわち彼女の身体はいろいろな病で鞭打たれていた。しかし、もっと酷いことに、彼女の精神は、重い放心状態のために自己に対する意識を失っていた。確かに、彼女は重い精神錯乱に陥ったために、畑、森、死者の埋葬場所、野獣の棲む荒地、遠

くにある洞窟を歩き回り、それ以上歩く力がなくなったところで歩みを止めた。彼女は人の集まるところを好まなかった。というのは、過度の放心状態から自分を人間と判断できなかったからである。そしてついに、全能の神の憐れみ深さは、彼女のことを気にかけて、彼女が散々歩き回って疲れ、ある場所に倒れ込んだところで、彼女を訪ねようと望まれた。すなわち、美しい容貌の白い服を着たある人物が彼女の前に現れ、次のように慰めの言葉をかけた。彼は言う。「シャンボンの修道院に行きなさい。そこには至福なる乙女にして聖なる殉教者ヴァレリアの亡骸が葬られています。それから、全能の神を称えて、またアキテーヌの輝かしい説教者マルシアルを記念して、祭壇が建てられています。そこに留まって暮らさない。そこにいれば、天の憐れみが、彼らの功績と執り成しによって、あなたに四肢の健康と精神の働きと分別を取り戻してくれるでしょう。」前述の女は天の命令の指図に従い、ここへ大急ぎで来ようと考えた。ここで彼女は神の憐れみに満ちた好意を願い求め始めた。約束通りに、至福なる乙女ヴァレリアの仲介と前述の聖マルシアルの同意とによって、自分を助けに来てくださるように、と。ついに神の憐れみ深い好意は彼女の祈りを聞き入れた。これほど偉大な乙女の功績を示すため、またこれほど優れた司牧者の好意を明示するために、女は身体の健康を与えられ、そして彼女に分別ある意識が取り戻されたのである。彼女は今もここに留まっており、自分を救ってくれた守護者たちへの報いとなり得るような、僕としての奉仕に尽力している。すなわち、教会を清掃し、捧げ物をおこない、できる限りの感謝を神に捧げることによって。実際、彼女はここを離れてどこかへ行こうなどとは思わない。なぜなら、彼女は、自分をここに連れて来た方からそうするのを禁じられたのであり、また自分に情けをかけてくれるよう神の憐れみを求めることを命じられたからである。

8.

他にも述べておくに値することがあるが、それらは、ここで神によって為されたと報告されていることである。しかし、それらは文書に載せられてこなかったため、あなた方の愛情に対して、これまでのような適切さをもって完全に報告することはできない。それはここに住む者たち

の落ち度と見なされるべきことと、あなた方は疑っていない。しかし、我々は今後、勤勉に努力を重ねようと呼んでいる。それは、神の憐れみ深さが、ここで、乙女にして自らの殉教者の功績を示すために奇跡を行うことを望んだとするなら、その意図があつて為された奇跡が、文字に記されて、後の兄弟たちに知られるべく保存されんがためである。だが、さて、親愛なる兄弟たちよ、我々はあなた方の愛情に対し、次の励ましの説教を送る。我々はあなた方の愛情に注意を促す。それによって、あなた方が最高の神から聞き入れられるに値する者として振る舞えるためである。なぜなら、主は正しい者たちの祈りを聞き入れると書かれている。すなわち正しい者たちとは、神のものを神に捧げ、自分のために使いたいと思うものを人々に差し出す者たちである。確かに、これを行う者たちは、使徒の教えに従つて、律法を完成させる者たちである。なぜなら、神は決して我々に神自身のためになることを命ずるのではなく、我々のためになることを命ずる。そして、ご自分が我々に愛されることを望むのは、我々が永遠の命を得られるようになるためであり、また聖なる天使たちとともにそれを永遠に享受できるようになるためである。確かに、神を愛する者たち、神の命令を守る者たちは、自分たちが神から愛されていることを確信できる。主イエス・キリストは言っている。「私を愛する者、そして私の命令を守る者は、私の父から愛される。」主の命令をあなた方はよく知っている。それでも、あなた方はその命令にしばしば耳を傾け、絶え間ない瞑想によって心に留めなければならない。すなわち、主は神を愛し、隣人を愛し、父と母を敬うよう命じている。主は命じている。殺してはならない、姦通してはならない、盗んではならない、偽証してはならない、と。また、売淫してはならない、と。なぜなら売淫は不正な同衾だからである。確かに主は命じている。酔つてはならない、嘘をついてはならない、偽証してはならない、悪口を言つてはならない、偽誓してはならない、奪つてはならない、憎んではならない、と。主は教えている。我々が空腹の者に食べ物を与え、喉の乾いた者に飲ませ、裸の者に服を着せ、病人を見舞い、牢獄に閉じ込められた人を探し、来客を受け入れるように、と。また、完全の高みに達するために、我々が我々の敵を愛し、我々を追跡して陥れようとする者たちのために祈るように、と。これらが主の命令である。これらを守る者た

ちは、永遠の罰を免れ、悪魔の仲間から離れ、天使たちとの誼みを結び、永遠の至福の喜びに与る。親愛なる兄弟たちよ、これら主の命令を、体力を尽くしてまた熱意を尽くして、果たそうと努めるなら、あなた方の祈りと願いは、聖なる乙女にして尊い殉教者ヴァレリアが、神にして我々の主であるイエス・キリストに執り成すであろう。そしてあなた方は、彼女の仲介によって、また父と聖霊とともに代々限りなく生き支配しておられる方の寛大さによって、正しく望むことは何であれ受けるであろう。アーメン。